

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月29日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520784

研究課題名（和文）世界地誌学習の再構築に関する理論的・実践的研究

研究課題名（英文）Theoretical and Practical Study on the Reconstruction of World Geography Study

研究代表者

村山 朝子（MURAYAMA Tomoko）

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：40375358

研究成果の概要（和文）：

平成20年学習指導要領社会で「世界についての学習」が拡充されたことを受けて、小中学校における世界地誌学習をESD（持続可能な開発のための教育）の観点から再構築することを目的とし、国内外での世界地誌に関連する学習の実態調査、教科書等教材調査、教材開発のための調査研究を実施し、段階的な世界地誌学習のカリキュラムを検討するとともに、スウェーデン等を事例とする世界地誌学習の教材開発を行い、その有効性を検討した。

研究成果の概要（英文）：

Based upon the enhancement of “study on the world” in social studies through the curriculum reform in 2008, regional studies on the world should be restructured from the viewpoint of Education for Sustainable Development in elementary and junior high schools. In this connection, I developed materials for teaching world geography in Sweden as an example and discussed its usefulness, through the survey on current teaching of world geography and textbook contents and investigation for material development in Japan and other countries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：地理教育

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：世界地誌、地理教育、教材開発、カリキュラム、ESD

1. 研究開始当初の背景

（1）「世界についての学習」の充実と急

がれる教材開発

平成 20 年中央教育審議会答申において社会科の改善として「世界」の学習の拡充があげられた。続く学習指導要領改訂で中学校社会科地理的分野の目標に「世界の諸地域に関する地理的認識」の文言が追加され、平成 10 年改訂で削除された世界地誌が内容に再登場し、世界についての学習は質量とも大幅に拡充が図られた。

新設された「世界の諸地域」学習と平成元年版までおかれていた地誌学習との相違を明らかにし、新たな世界地誌学習の具体的な理念と方法を提示し、教材開発を行うことは、喫緊の課題である。

(2) ESD の視点からの世界地誌学習
2002 年国連総会において「ESD (持続可能な開発のための教育) の 10 年」

(2005~2014年)の決議が採択された。あらゆる事象は地球上のいずれかの場所、地域で生じているものであり、その事象に対する理解・考察を深めていくには、その場所、地域に対する理解が欠かせない。社会科における ESD は、具体的な現実の題材を取り上げることから始まることが重要であり、新たな世界地誌学習は ESD の充実という点でも重要性が増している。

(3) 海外調査研究の意義

諸外国においては、一般に世界地誌(的)学習は小学校から高校まで行われ、発達段階に応じた目標と内容構成となっている。スウェーデンにおける地誌学習は、開発教育の理念を発展させた ESD としての側面が強く、同国の教育を研究対象とする意義は高い。また、ESD の視点からの世界地誌学習においては、世界の地域レベルの事例教材の開発が求められる。

スウェーデンは、これまで公民分野で環境、福祉、平等といった視点からトピック的に取り上げられる程度であ

るけれども、同国をはじめとする北欧諸国は持続可能な社会の形成の一つのモデルとしての教材として適しており、同地域を事例とする教材開発の意義は高い。

2. 研究の目的

平成 20 年学習指導要領で「世界についての学習」が拡充されたことを受けて、小・中学校における世界地誌学習を ESD (持続可能な開発のための教育) の視点から再構築するために、本研究は、内外における世界地誌学習に関する実態調査、関連教科書等の調査をふまえ、世界地誌学習の理念・内容を検討し、カリキュラムの事例、教材の開発を行う。

3. 研究の方法

研究は国内調査と海外調査による。

(1) 茨城県内小中学校における世界についての学習に関する実態調査ならびに教科書等教材における世界の取り扱いの調査を行い、地誌学習のカリキュラムのあり方を検討する。

(2) この分野において先進的かつ特色ある取組の実績があるスウェーデンをはじめとする海外での地理学習における世界の取り扱いに関する調査を行い、地誌学習のカリキュラムのあり方を検討する。

(3) 現地での資料収集・地域調査をふまえ、ESD の観点からスウェーデン等を事例に教材開発を行う。

(4) (1)~(3)をふまえ、附属学校等の協力を得ながら、世界地誌学習カリキュラムと開発教材の有効性について検討を進める。

4. 研究成果

研究の主な成果は以下の通りである。

(1) 附属小中学校をはじめとする茨城県内小中学校の協力を得て、児童生徒の世界についての認識調査を行っ

た。

その結果、児童生徒の学習に対する興味・関心の高低は、学習対象が国内か世界かという地域による違いよりも取り上げる題材によることが明らかになった。したがっていわゆる同心円の拡大カリキュラムは必ずしも適切とはいえない。また発達段階に応じて興味・関心の対象は動物や自然、同世代の子どもの生活などから次第に社会、経済領域に拡大し、またそれらの関連性に及ぶことが明らかになった。

一方、教科書等教材調査や教師への聞き取り調査から、中学校社会科地理的分野の教科書は、総論的で具体例が乏しく人々の生活がとらえにくいこと、教師が従前の学習指導要領における方法論重視の調べ学習から脱却しきれず、学習者自らが世界像を構築するための地誌学習への転換ができていないこと、教師の世界についての知識も乏しく、教科書に頼るものの記述量が増えた教科書を使いこなせない実態がみられる。

- (2) スウェーデン、イギリス、フィンランドでの地理学習における世界の取り扱いについて、学習指導要領、教科書等を収集し分析した。

日本の教科書との違いとしては、教科書は読み物的要素をもっており、写真・図版は厳選されて数は必ずしも多くないが、一つ一つが大きくインパクトがある。各国ともに小学校からローカルなスケールでの世界の自然や人々の生活をはじめとする諸事象を取り上げ、段階的にスケールを広げた事例も加えながら、継続して世界を取り上げている。またESD的な視点を取り入れ、日本に比べて自然地理的内容の比重が高い。とくにフィンランドでは地理は理科に属し、なかでも低学年では生物との関わりが強い。

- (3) (1)(2)の成果をふまえ、世界地誌カリキュラムとして次のような要素を取り入れることが適当である。

- ① 小学校中学年において日本と環境等が大きく異なる地域の人々の具体的な生活や動植物などについて、身近な地域や自分たちの生活と比較しながら取り上げること。
- ② 高学年においてはアジアやアフリカなどを中心に、可変的スケールで地域の文化と自然に着目してとりあげること。
- ③ 中学校においてはESDの観点から自然に加えて社会、経済的観点を加えた地誌学習を導入すること。

なお現行のカリキュラムでも、国内の地域の事象を取り上げる際に、国外の地域における同様の題材を比較対象として取り上げるなどして、小学校段階から積極的に世界についての学習を組み入れることは可能である。

- (4) (1)～(3)の成果をふまえ、スウェーデンやイギリスでの現地調査をもとに、発達段階に応じた写真資料や物語教材などの教材開発を進めた。小学校中学年社会においては高緯度冷帯の風土と動物、子どもたちの日常生活、高学年においては季節の行事、生活文化、中学社会においてはストックホルムなど持続可能な都市づくりの事例としてその背景や人々の生活の教材化を行った。また百年前に国土理解読本として著された『ニルスのふしぎな旅』を物語教材とし、同作品に描かれた地域を現在と比較するなどして、地域性やその変容の理解に効果を上げることを示した。そのほかマレーシアなどの教材化を進めた。

- (5) 以上をふまえ、附属中学校教諭や委託生、学生等の協力を得て、提示した地誌カリキュラム、地誌教材と

しての有効性を検討した。また大学院生等の協力を得てモデル授業等を構想するとともに、附属小学校でESDの視点を取り入れた社会科としての授業化について検討した。

ただし、実践的研究としての開発教材やカリキュラム案の検証が不十分であったことが反省点としてあげられる。今後、附属学校その他県内の学校の協力を得て検証を進めるとともに、モデル授業や教材の開発をさらに行い、成果を公にして広くその普及を図りたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 村山 朝子『『ニルスのふしぎな旅』はいかに生まれたか』スウェーデン交流センター、ビョルク 118号、pp.2-7、2013、査読無
- ② 村山 朝子「社会科教育における地理の役割」、日本地理学会、E-journal GEO、Vol.7, No.1、pp.11-18、2012、査読有
<http://dx.doi.org/10.4157/ejgeo.7.11>
- ③ 池 俊介、村山 朝子「課題研究 地理学習で諸地域をどう扱うかー新しい地誌学習の内容と方法」社会科教育研究 112号、2011、p.64、査読無
- ④ 村山 朝子「社会科における地理教育の意義と役割」日本地理学会発表要旨集 79号、2011、p.24、査読無

[学会発表] (計3件)

- ① 村山 朝子「新学習指導要領社会科授業の進め方地理的分野」福山市学校教育研究団体連絡協議会中学校社会科研究会、2012.8.1、福山市神辺文化会館。
- ② 村山 朝子「社会科における地理教育の意義と役割」日本地理学会春季大会、2011.

3.30、明治大学。

- ③ 村山 朝子「近代国家形成期における地理教育の役割」茨城地理学会、2010.8.21、茨城大学。

[図書] (計1件)

- ① 村山 朝子 Current Situation and Prospect of Geography Education as Part of Social Studies Education in Japan (2012 投稿中)、査読有、英文叢書 *Geography Education in Japan* (仮題)、Springer.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村山 朝子 (MURAYAMA TOMOKO)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：40375358